

鎌倉殿を支えた武蔵武士のふるさと ～比企地域を巡る～バス旅

2022-11-22 記 小倉洋一

■実施日：2022-11-17(木)

■参加者：21 名

■行先：比企地域

■ガイド：東松山観光ガイドクラブ、嵐山町観光ボランティアガイド

2 年連続での NHK 大河ドラマの舞台となった埼玉県、去年は「青天を衝け」で日本資本主義の礎を築いた渋沢栄一の深谷市が。今年は「鎌倉殿の 13 人」の武蔵武士が活躍した比企地域が脚光を浴びている。

昭和世代では鎌倉幕府の成立年を覚えるのに 1192「いい国」つくろう鎌倉幕府の語呂合わせで年号を覚えてきたが、今では 1185「いい箱」つくろう鎌倉幕府が定着している。

ところざわ倶楽部では文芸講座「動乱の鎌倉を生きた郷土の武将と文學」を竹内好夫先生（観世流謡曲名誉師範）講師により二人の武将「比企能員と木曾義仲」を取り上げ大河ドラマの基礎知識を学び楽しく見ることができている。

そのような比企地域の武蔵武士である比企能員・畠山重忠・源範頼・木曾義仲や比企の尼・丹後の局などが活躍した比企地域を東松山・嵐山町観光ボランティアガイドの説明によりバスで探訪した。

◆行程

スタート：小手指駅南口⇒岩殿観音正法寺⇒扇谷山宗悟寺⇒吉見観音安楽寺⇒昼食(そうま東松山店)⇒菅谷館跡⇒鎌形八幡神社⇒大蔵館跡⇒とうふ工房わたなべ⇒小手指駅南口⇒解散。 走行距離約 130km 小型バス利用

見学場所

◆岩殿観音正法寺

ボランティアガイドとの待ち合わせ場所は正法寺の上の駐車場であったが、誤って下にある参道の入り口の駐車場に入ったためロスタイムがあった。歴史ある岩殿観音正法寺の参道は門前町の面影を残し、なだらかな坂道が本堂に向かっている。大晦日の除夜の鐘つきや初詣、など四季折々の行事にはたくさんの参拝者で賑わいを見せている。境内にある大イチョウは樹齢 700 年を超えているといわれている。黄葉の見ごろは 12 月に入ってからか、青々とした葉がこぼれんばかりであった。

寺伝によれば鎌倉時代初期に源頼朝の命で比企能員が復興して坂東札所第 10 番となった。



北条政子の守り本尊だったと伝わっている。

鐘楼・草葺き屋根の建物は市内で最も古い建造物で東松山市有形文化財に指定されている。
銅鐘・第2次大戦中も供出にならなかった梵鐘。鐘撞きは1回許可され、代表してOさんが鐘を撞いた。重く余韻のある鐘が谷間に響き心地よかった。

◆扇谷山宗悟寺

境内掲示による宗悟寺の縁起

宗悟寺は天正20年(1592)にこの地を知行した旗本森川金右衛門氏俊が中興した寺である。

鎌倉幕府二代将軍源頼家の妻若狭の局(比企能員の娘)が持参したと伝わる「頼家公のご位牌」と夫頼家公を失い、あたかも体を蛇に巻き付かれたような苦しみから逃れるために祈願したという「蛇苦止観音」がお祀りされている。境内には、地元有志による「比企一族顕彰碑」が建立されている。

本堂に上がり「頼家公のご位牌」「蛇苦止観音」や森川氏の陣羽織を拝見した。



◆吉見観音安楽寺

岩殿山安楽寺は坂東11番の札所で古くから吉見観音の名で親しまれてきた。

「吉見観音縁起」によると今から約1200年前、聖武天皇の勅命を受けた行基菩薩がこの地を霊地とし、観世音菩薩の像を彫って岩壁に納めたことにその創始を見ることができる。延暦の代、奥州征伐のとき、この地に立ち寄った坂上田村麻呂によって領内の総鎮守となる。その後、源平の合戦で名高い源範頼が吉見庄を領するに及び、本堂・三重塔を建立したが、天文6年(1537)後北条氏が松山城を攻めた際に、その戦乱によって全ての伽藍が消失した。現在の本堂は今から約350年前の寛文元年、秀慶法印によって再建されたものである。その様式は禅宗様に和様を交えた典型的な五間堂の平面を持つ密教本堂で、内部各部材に施された華麗な色彩文様とともに江戸時代前期の様式を保持している。屋根はもと柿葺であったが、大正12年の改修の際に銅瓦棒葺に改められた。



参道に厄除け団子屋が一軒あった。厄除け団子のお話の看板があったので引用する。

【昔、ある村で疫病(えきびょう・悪性の伝染病)が流行ったそうです。大変困った村人が観音さまにお願いして助けていただこうと、おだんごを作りお供えして「病気がなおりますように」と、一心に御祈願したそうです。その帰りに、おそなえしたお団子を下供としていただき、分け合って食べたところ病気が治ったそうです。】

それ以来、観音さまへお礼参りをするようになり、現在は毎年6月18日の御開帳の日は、一年の感謝を祈りおだんごを食べる特別なご縁日となり、朝の2時頃から団子の購入客と参拝客で参道が大変混雑するようになった。

◆菅谷館跡

畠山重忠が居住した地と伝えられている。

畠山重忠は現在の深谷市畠山の地に生まれ治承4年(1180)源頼朝が石橋山に挙兵した時、父重能が平家に仕え在京していたため、弱冠17歳の重忠も平家方に属し、頼朝方の三浦氏を討ちました。しかし、その後まもなく頼朝に仕え鎌倉入りの際には先陣を務め、宇治川の合戦や一の谷の合戦、奥州藤原氏の征討など多くの手柄をたてたことなど「平家物語」に詳しく記されている。地元では児玉党と丹党の争いを調停するなど、武蔵武士の中心人物として人々の信望を集め、頼朝からも厚く信頼されていた。頼朝死後も御家人の実力者として活躍したが、幕府内部の勢力争いに巻き込まれ、北条氏の陰謀により42歳の若さで非業の死をとげた。



重忠は源義経とともに源平の戦いで活躍して「武士の鑑」と呼ばれた人物でした。

畠山重忠公像

昭和4年(1929)に造られたコンクリート製の像で、菅谷館跡の二の郭にある土塁の上に立ち、高さは2.5m。平成23年度に嵐山町の文化財に指定された。

本人も身長6尺(182cm)で目鼻立ちのはっきりした美男と伝わっている。

菅谷博物館は是非見てみたいと思っていたが企画展の入れ替えのため休館日となっていた。

◆鎌形八幡神社

平安時代の初期、延暦年間に坂上田村麻呂が九州の宇佐八幡神社宮の御霊をここに迎えて祀ったのが始まりであると伝えられている社である。

この説からすると鎌倉の鶴岡八幡宮より古いことになる。八幡神社は武門、武将の神として信仰され、源義賢、源義仲、源義高、3代の伝説がこの地に多く残り、源氏の氏神として仰がれている。境内には木曾義仲産湯の清水が今でも湧き出ていることが見どころの一つである。



◆大蔵館跡

仁平3年(1153)に木曾義仲の父・源義賢が秩父重隆の娘をめとり移り住んだ館跡とされている。

る。義賢は、源氏の棟梁、源為義の次男として生まれ、近衛天皇が皇太子のときに東宮警護の長官である帯刀先生を務めた。しかし部下の不始末によって職を追われ北陸から上野とまわり武蔵へときた。当時武蔵国で大きな力をもっていた秩父氏と義賢が結んだことで、義賢の力が大きくなることを恐れた兄義朝は、義平に館を攻め込ませて義賢を討つという大蔵合戦があった。このとき駒王丸(後の木曾義仲)は木曾の地へと逃れた。



これらをボランティアガイドは紙芝居形式にして系図を使って簡潔に説明した。

◆とうふ工房わたなべ

ときがわ町にあるとうふの名店「とうふ工房わたなべ」に立ち寄り、ざる豆腐、おぼろ豆腐、あげ棒、湯葉、蓮根がんもなど各人お土産とした



いざ鎌倉と言われてはせ参じる鎌倉街道は、鎌倉幕府の要衝の道路で幕府を守るためにあった街道と思われるが、末期には討幕の新田義貞に使われた皮肉な街道となった。

来年の大河ドラマは「どうする家康」若いころの家康が「どうする」と、揺れて、迷って・・・今川家につかえる。後に岡崎城城主として独立、三河統一を果たす物語である。

さて、来年のバス旅行はどうする、家康の心境になって考えてみたい。

担当 栗屋貴夫 小倉洋一 谷 恵子 安田好子